昭道報
Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

第18号(第2版)
平成18年11月26日発行

＜発行所＞
関西合気道競技連盟広報部
（広報部長：中村芳勝）
＜編集者＞
昭道報係

第二十六回関西学生合気道競技大会

～ 関西学生大会の反省と国際大会に向けた課題 ～

日本合気道協会師範 成山哲郎

平成十八年六月十一日、住吉武道場（大阪市住吉区）で行われた第二十六回関西学生大会は例年同様、学生たちの若さ溢れる大変白熱した大会であった。しかしながら本稿では本大会の反省と、来る三年後に開催を控えた国際大会に向けての課題として師範としての立場から以下の点につき指摘、提起したいと思う。

私の師匠である富木謙治師範は生前、合気道競技の「意識の統一をはかる」ことの大切さを説かれていた。各大学の指導者、選手、そして審判員、審査員等関係諸兄には特に以下の点、ご熟慮いただきたいと切に願うものである。

1．礼法に対する考え方

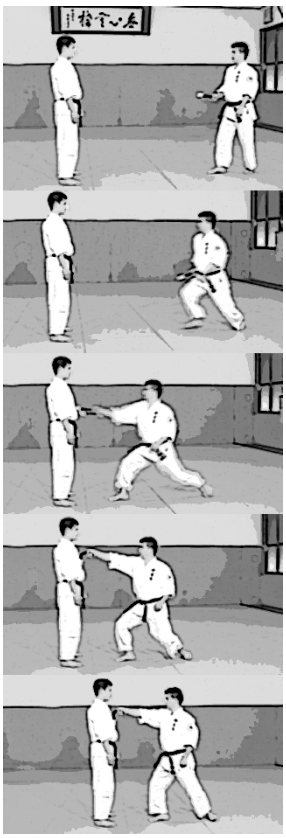
礼法は武道の基本であり、前提である。闘争心は大事だが、礼を失すればそれはただの暴力である。競技者は競技前、中、後を問わず、礼を行う時は踵をそろえ、姿勢を正して行われなければならない。競技者の片方がしっかりと踵をそろえ礼をしてから競技に入るのに対し、もう片方が攻撃に備えて構えた状態で競技を開始するのでは明らかに不公平であり、お互いを尊重する武道精神にも反するということが認識されなければならない。

また畳の上は全て審判員の指揮下にある。畳に外にいる者が競技者に声援を送るのは別として、競技を待つ、畳の上にいる学生が立ち上がり、身振り手振りを交えながら仲間の応援をするのは審判員によって諌められて当然の行為である。

2．姿勢についての考え方

対武器を建前とする合気道競技において姿勢は攻防の原点であり、自然体が理想である。しかしながら本大会ではその自然体を逸脱した、突かれまい、技に掛かるまいとする見苦しい姿勢が残念ながら少なくなかった。

最初から上体を屈め込み、手を前にぶらさげる構え方は合気道短刀競技にはそぐわない。何故なら対武器においては相手の攻撃をかわす足捌きが重要なのであり、それを自由ならしめる構えこそが自然体なのである。加えて相手が武器で攻撃してくるのに予め手を前に出して構えることがあるだろうか。実際の世界では手さえも切られれば致命傷にもなりかねない。徒手側は自然体で構え、相手が突いてきた瞬間に手捌きと足捌きにより相手の攻撃を無効にすることが大切なのである。



また、相手の技に掛からないように状態を前に屈め込み、頭を下げる組み方は自称に述べる合気道競技の間合いとの関連性からも理想からは程遠い。お互いの正しい姿勢こそが攻防の原点である所以である。

3．間合いについての考え方

合気道乱取競技は当初、徒手乱取からスタートした。しかし、一部柔道界の先生の中から「あの間合いならば足払いがかかるではないか。何故かけないのですか」といった厳しい意見も出たという。そこで富木師範は短刀という武器を持たせることでお互いに間合いを持たせ、足腰の届かない間合いを実現しようとされた。先述のように四つに組み合う競技では歴史的にも柔道や相撲の右に出るものを見つけることは難しいことを我々は認識しなければならない。

しかしながら、本大会でも短刀側による抱え込みや徒手側による両手で抱えながら相手を制御するやり方が目立ち、当初の富木師範の意図とするところが見失われつつある感を覚える。正しい間合いを確保することは合気道競技らしい勝機を捉えた鋭い技を生みやすい。我々の合気道短刀乱取競技は間合いを持たせることで技の独自性を確保し、日頃の合気道の稽古を活かすことができるのだということを競技者、審判員一人ひとりがもっと自覚しなければならない。

4．技についての考え方

4A．短刀側の問題について

短刀側の突きは正中線上にしっかりと肘を伸ばし、正しい姿勢で有効部位にコントロールされた状態で突かなければならない。従って相手に衝撃を与えるようなコントロールされていない突きは合気道短刀乱取競技において短刀側に指導を与える対象であるということを改めて指摘しておきたい。本大会においては、相手の防御を上から衝撃によって押しつぶすようなフルコンタクトと見られる突きがしばしばみられたが、それは大変残念なことであった。我々の競技は安全性の上に実力の客観化を図ることを目指しているのであり、そこを思い起こしてほしい。短刀突きそれ自身も手刀の応用として働く立派な技である。それは手刀動作の延長線上に位置づけられ、「突く」「打つ」技術の他にも「払う」「止める」「抑える」等の技術性も含んでいる。

3．の間合いのところで述べたように、不用意な接近はそういった短刀側、また徒手側の手刀の術理に基づく優れた技術性を阻害する結果となることは留意されるべきである。具体的には短刀側が短刀を持たない方の手を相手の背中にまわし、徒手側の技を出しにくくさせるような抱える行為、また手刀ではなく、握ることにより徒手側を制御するような行為があった場合には短刀側に指導が与えられなければな

（次頁へ続く）

（前頁の続き）

らない。

短刀側が正しい間合いから正しい突きを出すことがお互いの妙味ある攻防を可能にするのである。

4B．徒手側の技について

前述の通り、合気乱取法が徒手乱取から短刀乱取に移行する際、間合いを取ることによってお互いの技の妙味を出やすくするようにということが意図された。従って短刀乱取競技において徒手側が両手で相手の両肘を制御しながら施技するというスタイルは足腰の届く間合いであり、決して好ましいとは言えない。審判員はこれを指導しなければならない。

また前述のケースだけでなく、徒手側は短刀側にしがみつき、とにかく倒せば良いというような考えでは良い技は生まれない。常に自らの体勢を残した状態で施技することが求められる。

以上の点を踏まえ、選手のみならず審判員、審査員の各位には冷静かつ毅然とした態度でこれからも判定を行っていただきたいと切に願うものである。

第七回 関東少年合気道競技大会

～ 引率者所感 ～　昭道館本部指導員　酒井進之介

第七回関東少年部合気道競技大会が二〇〇六年七月十六日、東京都武蔵野市総合体育館にて開催されました。

今回、私自身としては初めて関西から少年部員を伴い、関東の少年部大会に参加させていただいた。関東の少年部大会は七回目を迎えているだけに参加団体、参加者ともに多く、大変盛況であった。また、どのクラブの参加者に対しても自分たちの持ち味をいかんなく発揮しうる競技種目が用意されており、素晴らしい大会であったと思う。そしてこれだけ特色豊かな多くの参加者が集まる大会を運営された関東の先生方の少年部大会に対する熱意と運営面のノウハウについては私自身が大変勉強となった。なお大会の運営には昭道館武蔵野から会員の方が多く駆けつけられ、受付やアナウンス、そして運営のいたるところで活躍されていたのが深く印象に残った。

さて、今回昭道館本部からは河内彰人君（中学一年生）と福本真啓君（中学三年生）が本大会に参加した。当日朝五時十五分、昭道館の道場前に集合して新大阪から新幹線で東京へと向かった。関西の少年大会ではこれまで相当の成績を残してきた彼らであったが、本人たちにとっては関西以外で行う初めての大会であり、大変緊張したものと思う。

結果は演武競技では優勝した稲城合気道倶楽部の浅野兄弟組に惜しくも敗れたものの、短刀乱取競技では福本君が準優勝に、短刀体捌競技では河内君が三位に入賞し、素晴らしい結果を持ち帰ってくれた。本人たちも手応えをつかんだ様子であった。

因縁だったのは福本君が決勝でまたもや浅野海彦君（兄）に、河内君は準決勝で浅野秋生君（弟）に敗れ、地域を越えて良い意味でのライバルが生まれた瞬間だったことである。大会後は浅野君兄弟のご両親も交え少しお話しする時間があり、仲良く記念写真も撮り親交を温めた。

大会の競技において全体的に感じたのはまず短刀乱取競技において技が出にくいということである。これは短刀の突き方が未熟であること、そして双方の姿勢が悪いこと、これらが技を出しにくくしている主な原因であると思われる。またルールを簡素化して少年部の短刀乱取競技審判規定を作り、技が出やすくするようにしていくことも今後の課題であろう。

演武競技においてはとてもダイナミックで良く稽古された内容の演武と、そうではなかったものとの差が大きかったように思われる。大会の演武に大きく影響するのはやはり取りと受けの合わせた数であるが、基本技を含めた基本技法を日頃から統一して稽古していくことで、ある程度のところまではみんなが同じようにレベルを上げていくことが出来るのではないかと思う。各クラブの特色が同じ基本技法の上に立って出ていたらもっと全体的なレベルは上がっていたに違いないと感じた。

団体として参加されていたクラブの中で特に印象に残ったのは「昭道館いわき」であった。「昭道館いわき」は国士舘大学合気道部ご出身の野口先生が福島県で指導されているクラブとお伺いしていたが、今少年部員にもっとも求められるべき礼儀と挨拶がしっかりとできていたのがこの「昭道館いわき」であった。また保護者が全面的にクラブをバックアップしている姿には今後の教室運営、及び大会への参加形態を考えていく上での大きな参考となったことをご報告いたしたい。

最後に本大会への参加にご協力いただきました福本君、河内君の保護者様、そして本大会への初めての参加ということでご多忙の中いろいろとご指導をいただきました佐藤竜一先生に心から御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

第二十六回関西学生合気道競技大会結果

【乱取競技団体戦】[男子]①早稲田大学②成城大学③関西学院大学

【乱取競技個人戦】[女子]①市田智美（関西学院大学）②岡本初美（関西学院大学）③佐々木優子（成城大学）[男子]①塩澤一樹（早稲田大学）②山本広之（天理大学）③是永大和（関西学院大学）

【演武競技（対徒手）】[男子]①近畿大学（北野大輔・馬場伸幸）②早稲田大学（上原航・堤巨樹）③國士舘大学（古橋拓馬・深町陽輝）[女子]①関西学院大学（岡本初美・市田智美）②天理大学（竹原理子・山本理絵）③大阪教育大学（松島みどり・戸井絢子）

【演武競技（対武器）】[男子]①近畿大学（高木健・須一力）②関西学院大学（吉岡究・山本尚輝）③天理大学（山本広之・香取満彦）[女子]①関西学院大学（柏堂佳子・國分由香）②近畿大学（岡紀波・武田恭子）③奈良女子大学（桝田仁実・上田量子）

第四回 関西少年合気道競技大会

二〇〇六年七月二十三日（日）、住吉武道館（大阪市住吉区）で第四回関西合気道競技大会が開催されました。十五団体一五〇名の選手が参加し、普段の稽古の成果を競い合いました。

成山哲郎師範の大会講評にもありましたが、「継続は力なり」という言葉を具現化させるように昨年以上にレベルの高い大会となりました。特に昨年以上に元気の良い挨拶が出来ていたと思います。種目別混合団体戦の体捌き競技では、少年部ならではの組み合わせ、男女の対戦、体格差が大きい対戦がありましたが、みんな正々堂々と立派に戦えていたと思います。残念なことは乱取競技で相手をコートから押し出そうとする行為が何度か見受けられたこと。勝負なので勝つことを意識することは大切ですが、力づくではなく技で戦えばもっといい試合になるのではないでしょうか。ではここで参加者の感想文をご紹介したいと思います。

「この大会で得たもの」

昭道館本部 藪下亮

ぼくは今回この大会に高校生部門が設けられることになり参加しました。第一回目の大会にも参加しましたが、今回の大会を見て驚かされることがありました。それはみんなの技術の向上でした。第一回の大会に比べると今回の大会は大変見応えがあり、自分自身大変勉強になった大会だったと感じました。

大会というのは勝敗を決めるだけでなく、自分の技術の発表の場として大切な場でもあると思います。だから大会で優勝できなくても、自分の百パーセントの技術を発表できれば優勝以上のものが得られると思います。

今回、自分は準優勝となってしまいましたが、ぼくはたくさんのものを得ました。それはこれからの自分に対しての課題です。もし優勝していればこの課題は発見できていなかったかもしれません。しかし課題を発見できたことで、これから自分はもっと成長することができます。

この少年大会はこれから何十回、何百回続くと思います。その大会のたびに技術の向上は続くと思います。それは自分としても大変うれしいことです。しかし向上するということは優勝がむずかしくなるということだと思います。だから負けたところから何を発見するかということが次の大会の行方を決めることになるのだと思います。

「これまでの悔しさをバネに」

昭道館本部 能祖美幸

大会を終えての感想は「嬉しかった」です。

私は今までいろいろな大会に出てきました。そのいろいろな大会でメダルをいただいたり、新聞社の方から特別賞をいただいたりしました。この作文を書く前に、今までいただいたものを見ていましたが、「私ってめっちゃ頑張ってるなぁ」と思いニヤけました。でも今回乱取競技で優勝していなければ、喜びながら見る事は出来ませんでした。私は個人戦で優勝できたのは今回が初めてだったからです。個人戦では過去に二回出場していますが、両方とも優勝できませんでした。去年は決勝で負け準優勝となり、一昨年は初戦負けという無惨な結果でした。団体戦でも私のせいで準優勝になってしまったり、結果的に優勝できた団体戦でも、私が全試合相手に勝ったということもなく、ずっと自分自身納得がいっていませんでした。そして、個人戦で優勝できないということは私には実力が無いのではと思っていた時期もありました。でも今回出た大会は全種目優勝、やっと個人で優勝でき、初めて納得のいく結果を出せました。今まではただ悔しかった結果も、今ではそれがあったからこそ今回の結果につながったと思います。そして全種目優勝したという事で今まで以上に自分に自信がつきました。

大会で優勝すると自分に自信が付き、そしていろいろな人と試合ができ、自分にとってとても良い経験となるので、これからも優勝できるよう、そして一般の大会でも結果を出せるよう、もっと普段の稽古に励もうと思いました。私が出場できる少年部の大会はあと三回。このいずれも誰にも優勝の座は譲らない！！と決意しました。

目指せ四連覇！！

【大会結果】

■団体演武（コナミ杯）■
①昭道館本部 ②生駒教室・雲雀支部連合 ③新金岡教室

■種目別混合団体戦■
①昭道館本部 ②瑞光中学校・昭道館本部連合チーム ③天理支部

■演武競技■
［小学生の部］①岩本花奈・中あずさ（誠心会）②原千里・竹下結菜（昭道館本部）③杉原沙希・佐伯奈央（昭道館本部）［中・高校生の部］①能祖美幸・杉尾千尋（昭道館本部）②嶋崎絵実・西口真央（平野北中学校）③福本真啓・河内彰人（昭道館本部）

■短刀乱取競技■
［男子中学生の部］①大内悠平（新金岡教室）②福本真啓（昭道館本部）③永谷尚之（東岸和田教室）［男子高校生の部］①西田顕証（東岸和田教室）②藪下亮（昭道館本部）③玄番貴之（昭道館本部）［女子の部］①能祖美幸（昭道館本部）②嶋崎絵実（平野北中学校）③久保友紀（光明池教室）

第三十七回 全日本学生合気道競技大会を終えて

日本合気道協会師範 成山哲郎

二〇〇六年十月九日祝日の月曜日、奈良中央第2武道場にて第三十七回全日本学生合気道競技大会が開催された。例年に勝るとも劣らず、今大会も熱気の溢れる大変素晴らしい大会であったと思う。

さて、富木昌子大会名誉会長が開会式でもおっしゃっていたように、この古都奈良の街は千年以上もの歴史を持つ寺院仏閣が立ち並ぶ名所である。この古都奈良と同じように、我々の合気道が千年続くためにはどうすればよいか、私の立場から申し上げたいと思う。

私の師である富木謙治師範は生前「形も乱取も技に嘘があってはいけない」ということを力説されていた。つまり形においては正しい攻撃に対する完全なる防御、そして相手を技にかかりやすいように崩し、つくってから掛けるという技の整合性が大事であるということである。

一方、乱取においては自分から相手の技を受けにいくことはまずないことから、掛かった技は全て本物の技であると言える。しかし勝負に拘るあまり相手の技に掛かるまいとする腰をひいた突きや見苦しい相手へのしがみつきなどが時として見られる。これらは武道本来の意味を無視したものであると言える。対武器を建前とする短刀乱取競技において、相手に対した時の構えはもっとも重視されるべきものである。富木師範が「無心無構」という揮毫を遺されたことでも分かるように、我々の合気道の理想の構えは自然体（＝無構え）である。これを大きく逸脱した構えから繰り出されるものはどんなに良い技であっても突きであってもこれを認めることは出来ない。競技者や指導者は、上記の点にご留意いただきたいと切に願うものである。

大会結果

【乱取競技団体戦】[男子]①早稲田大学 ②天理大学 ③成城大学 [女子]①早稲田大学 ②成城大学 ③天理大学【乱取競技個人戦】[男子]①塩澤一樹（早稲田大学）②上原航（早稲田大学）③橋本宏太（大阪商業大学）[女子]①海浪麻由美（早稲田大学）②中野郁子（帝京大学）③秋山茉莉子（成城大学）

【演武（対徒手）】[男子]①天理大学（松本義男、木村慎吾）②近畿大学（北野大輔、勝又悠）③関西学院大学（大北昌平、小橋史佳）[女子]①天理大学（竹原理子、山本理絵）②早稲田大学（海浪麻由美、阿部可奈子）③大阪教育大学（松島みどり、永瀬理恵）【演武（対武器）】[男子]①天理大学（山本広之、香取満彦）②関西学院大学（内田雄士、吉岡究）③大阪商業大学（赤穂宗平、馬越泰樹）[女子]①関西学院大学（柏堂佳子、岩崎あゆみ）②近畿大学（松本都、岡紀波）③奈良女子大学（田添三良子、松井円佳）

JAA指導部主催夏季伊勢原講習会

昭道館本部 大西美緒

二〇〇六年七月二十九日・三十日の二日間、神奈川県伊勢原市立武道館に於いてJAA指導部主催夏季伊勢原講習会が行われました。

通称伊勢原合宿と呼ばれるこの講習会、今年の内容は次の通りです。

一日目 志々田師範による講習
富木理論の独自性 手刀、手刀体操、崩し

二日目 成山師範による講習
高段者審査内容 古流護身之形（対武器技法を中心に）

初日、内容の主たるものは後の先の崩しでしたが、それは今までに見た事のない形でした。ポイントは『伸筋』です。

志々田師範が皆の前でお手本を見せて下さるのですが、御自身も研究中との事で、納得のいく形にならない時もあるご様子でした。稽古生もまた、試行錯誤でした（私を含め、私の周りの事ですが）。ただ、この様な稽古をするとカンの良い人というのが分かります。お互い良く分からないまま動くのですが、技をかけられた時、無駄な力がかからず気持ちよくかけられる。頭で分からなくとも、感覚が理解し体を動かす瞬間というのを、何度も体験させられました。

これは、普段の稽古で技にとって大事な事が身に付いているからこそ出来る事でもあると思います。

二日目、成山師範の稽古では、まとめて稽古する機会の少ない中高段者の審査内容でした。最初に指導員の先生方が一通り施技して下さり、成山師範が技の重要な部分の説明をして下さる。更にグループに分かれ、各指導員の先生方の指導の下、技を稽古しました。技は同じでも、指導して下さる方の指導方法にそれぞれ特徴があり、とても変化に富んだ、充実した稽古でした。

今年の合宿は、例年にないスペシャルなものでした。それは、両師範が一緒にいらっしゃった事です。もちろん、各師範の指導日が決まっているので進めていかれるのは担当師範ですが、例えば志々田師範の稽古日でお互いに技を研究中に、成山師範が見て下さり、アドバイスを頂きました。この様な経験は普段の稽古でありえないのは当然ですが、何回か参加させて頂いた伊勢原合宿でも初めての事でした。残念ながら両師範が揃われていたのは初日だけですが、初日稽古後の懇親会でもお二人とご一緒出来、今年は本当に特別でした。

伊勢原合宿では、教わった事を少しでも自分たちが稽古する場所に持ち帰ろうと熱心な方が多く、心地よい緊張感で身が引き締まりました。また、初めてお会いする方と稽古する楽しみの他、久しぶりの再会も楽しめました。以前本部道場で稽古していたカルロス君が、帰国中に参加していたのです。

本部道場で稽古出来ない方々の目を通し、改めて成山師範を見る事が出来、本部道場で稽古出来る事の有り難さを再認識した伊勢原合宿でした。

昭道館武蔵野合宿に参加して

伊達由美子

五月十三日～十四日、静岡県の下田で第二回武蔵野合宿が実施されました。大阪からは六名が参加させて頂き、武蔵野メンバーと合わせると約二十名が二日間に亘っていい汗を流しました。初日は古流護身の形、後の先の崩し、投げの形表技、基本技十七本、短刀の体捌きから引き立て稽古等を稽古しました。特に護身の形坐り技一本目から三本目では、西井先生、佐藤先生に対していかにすばやく真剣な攻撃できるかという稽古もしましたが、攻撃が遅かったり、体勢が不安定で逆に倒されてしまったり、とても難しかったです。

二日目は初日の筋トレにより早くも訪れた筋肉痛を憎らしく思いながらの稽古となりました。古流投げの形(表技～応用技)、上段の崩しからの応用技、短刀の体捌きから崩しの稽古等を行いました。色々なアドバイスを頂いたり、また身をもって技の切れを体験させて頂いたりと、とても充実した二日間でした。これからの稽古に生かして行きたいと思っています。

稽古以外でも色々なイベントがありました。お昼から一行が訪れた下田海中水族園では、胸までゴムの服を着てビーチでイルカ達とじかに触れ合いました。感触はまるでゴムタイヤ、ひんやりとした体を撫でてやると、「もっと」と言わんばかりお腹を上に向けて、そんな人なつこい様子がとてもかわいかったです。でも何より最大のイベントはこの合宿の一週間後に結婚を控えた大杉さん、藤田さんのご両人をみんなで祝福(冷やかし?)して盛り上がったことでしょうか・・・。みんなが幸せのお裾分けを一杯もらったように思います。

今年も武蔵野合宿を実施して頂きました佐藤先生、大森先生には心からありがとうございました。武蔵野バンザ～イ！！

●●● 編集後記 ●●●

「第二十六回関西学生合気道競技大会の反省と国際大会に向けた課題」について成山哲郎師範が書かれた記事を記載しています。「国際大会に向けた」ということもあり、英語でも記載しようと英訳しました。今回はたまたま昭道館本部道場で居合わせたザビエル(Xavier Marechal)さんに校正を依頼しました。実はザビエルさん、英語圏の方ではなかったのですが、快く応じてくださいました。しかも時間切れとなったとき、自ら「メールで送ってくれたら続きをやるよ」って申し出てくださいました。いい人だぁ。ありがとうございました。

でも慣れない作業だと時間がかかるもので、締め切りに間に合わない公算が強くなった時、デービッドさんがそれを引き継いでくれました。謝々。

E-mail: shodoho@yahoo.co.jp

【昭道報係】今号のスタッフ
山形忍（編集長）
David Graves
伊達由美子
萬谷久美子

From the editors

To our readers. We choose the article that we translate into English from the articles in Japanese cause of not enough staff for translation. This time Mr.Xavier Marechal and David Graves (an editor) gave us a great help for Nariyama shihan's report. Thanks a lot!

【*Continue from page 6*】

by force, like a full-contact match, were often seen in this tournament. This was truly regrettable.

The aim of our conference is to objectively measure one's true ability while maintaining safety. This is what I would like to occur.

The *tsuki* itself is the application of *tegatana* [hand sword] and in turn becomes an excellent waza. The *tsuki* is the extension line of *tegatana-dousa*.

As written in part 3 of *maai*, careful attention should be paid to the careless approach of the person holding the *tanto* as well as to the opponent who does not have the *tanto* but has superior *tegatana* techniques.

To be concrete, the tanto side should be given a *shido* if he places his hand on the toshu's back in order to prevent a waza from occurring, or when grabbing the toshu rather than using *tegatana*.

A correct strike with the *tanto* from the right *maai* enables both offense and defense to achieve remarkable results.

4-B. About a waza of the toshu side

As stated above, when *Aikirandoriho* switched over from *toshu randori* to *tanto randori*, it was intended to make it easier to create a waza by creating the correct *maai* [distance].

Therefore, when the *toshu* attempts to do a waza by controlling both elbows of the opponent with both hands in *tanto randori kyogi*, this *maai* is incorrect, and undesirable.

A judge must point this out during the match.

In addition, not only the above-mentioned case, but also the *toshu* can be at fault at times. If the *toshu*, during a match, concentrates only on clinging to the *tanto* side, this actually becomes an obstacle to a good waza being able to be achieved.

It is mandatory that waza are executed while keeping one's own balance.

It is my wish that not only competitors understand, but also that umpires and judges judge in a calm and resolute manner in regards to the above-mentioned points.

昭道報
Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

Reflections of the Kansai Student Aikido Tournament and suggestions for the International Aikido Tournament

Tetsuro Nariyama
- Shihan of Japan Aikido Association -

The 26th Kansai Student Aikido Tournament was held on June 11, 2006 and like every year it was a very intense tournament full of youth and vigor.
However I would like to raise the following issues from a Shihan's perspective in reflection on this tournament and its implications regarding the international tournament coming three years from now.
During his lifetime, my master, Kenji Tomiki shihan, preached the importance of "attempting the unification of consciousness" through *aikidokyogi* [sport aikido].
It is my hope that everyone, the instructors and captains of each university, the competitors, the referees, the judges and all those concerned, will earnestly think about the following points in particular.

1. Thoughts about Etiquette

Etiquette is the foundation and premise of martial arts. A fighting spirit is important, but it is mere violence if there is no etiquette.
Rei: Before, during and after a match, competitors are to put there heels together, stand with proper posture and then bow,
It should be recognized that it is clearly unfair, and against the martial arts spirit of respect toward each other, to have, at the start of a contest, a competitor who is already prepared to attack his opponent, while the other competitor is properly putting his heels together and bowing.
In addition, the mat is entirely under the command of the head judge. Except for the people outside the mat cheering on the competitors, it is only natural that competitors who stand up, gesture and cheer for their teammate while waiting their turn for the competition on the mat, should be warned by the judge.

2. Thoughts about posture [*shisei*]

Correct posture [*shisei*] is the main source of attacking and defense when facing a weapon in sport aikido. *Shizentai*, the natural posture, is the ideal stance.
However, in this tournament, there were unfortunately a lot of unsightly postures taken by students trying to avoid an attack or avoid being thrown by a waza. These postures deviate from the natural posture [*Shizentai*].
A posture in which, from the beginning, the upper part of the body is bent, with both hands hanging forward, is unsuitable for aikido *tanto randori*.
Because, if footwork [*ashisabaki*] is important to avoid the attack of a weapon, the posture which lets this happen freely is the natural posture [*Shizentai*].
Moreover, would you put your hands forward beforehand even though an opponent is attacking with a weapon? In the real world, if your hand is cut, it may lead to you becoming unable to save your own life.
It is important to take a natural posture [*Shizentai*] and on the timing of the opponent's strike [*tsuki*] , subdue the attack using both handwork [*tesabaki*] and footwork [*ashisabaki*].
A posture such as bending your upper body forward and keeping your head low to prevent an opponent's technique is also far from the ideal with respect to the distance between each other known as *maai* in sport aikido
This is the reason why the origin of offense and defense is found within each other's correct posture.

3. Thoughts about *maai*

Sport Aikido started from *toshu randori* or empty hands competition.
However, some teachers in the Judo world expressed severe criticism regarding the *maai* of the players: "He can do *ashibarai* at that *maai*. Why doesn't he do it?" it was argued.
Because of this, Tomiki shihan implemented the *maai* for sport aikido. It is the distance from which the legs and hips of the opponents cannot reach each other when a *tanto* [knife] is held.
We must recognize that historically it is difficult to find a form of competition that exceeds judo and sumo in a grappling competition.
However, even in the Student Tournament, the way toshu controlled his opponent by holding with both hands was conspicuous, and I wondered if the original intention of Tomiki Shihan had not been lost.
Keeping the right distance helps to create an effective waza at the moment of "*Shouki*" [chance of winning] and this is what sport aikido is really about.
Each one of the competitors and judges must be aware that the originality of the waza is secured by keeping *maai* in *tanto randori* aikido, and that everyday lessons of aikido can be used.

4. Thoughts about waza.

4-A. Problems with the *tanto* [knife] side

The tanto strike [*tsuki*] is made with the arm and elbow stretched out straight above the centerline of the body [*seichusen*] and must strike while in a controlled state with correct posture in a valid part of the opponents' body.
Therefore, I want to point out that if the strike [*tsuki*] is not controlled and harms an opponent, the tanto side will be given a shido in aikido tanto randori.
Strikes attempting to crush the opponent's defense

【*Continue to page 5*】